

# 問題を背負って入園した子どもの指導



幼稚園に入園したときに、すでにさまざまな家庭事情や、住宅条件などがもとになって、はじめの集団生活における適応を困難にしている場合があります。そのような子どもに対する、担当教師の苦勞はたいへんなものです。このような子どもは、どのように指導したらよいのでしょうか。いろいろの例がある中から、二つ、ここにあげてみました。

## 複雑な家庭に育った子ども

宮崎 洋子

子の家庭の事情を知ることが出来た。  
一、恵子の家庭環境

父 二十八才、旧工業学校卒、製鉄現場技術員

母 二十八才、女学校卒、継母

妹 一才

毎年多くの子どもたちをその家庭からあずかるが、皆それぞれ違った環境の中で背負わされた問題を持ち込んで来る。

「時間が来れば次第になおりますよ」というような簡単な問題ならば、あずかる側にとつても、明かるい期待が持たれるが、見過ごすようなところにむずかしい問題が投げかけられていることがある。

恵子は入園当初から少しも手がかからず、何でも言われたことは出来、大勢の中では、とかく、存在を忘れられがちな子どもであった。話しかければ、うっすら笑って、ことは少なに答える。しかし、何となくこわばった顔をしていて、歩く時も、うつむき加減であるのが気になっていた。ちょうどその頃、母親にお会い出来、恵

家庭の事情は複雑で詳細を聞くことは出来ないが、一才前に実母と生別し、祖父母（父親の両親）の家庭で養育され、三才頃より、現在の母親に養育されている。祖母は本人を非常に愛育し、実母と生別していることを念頭において、かわいそうだ、かわいそうだ」と本人に会うたびに涙

を流して同情する。祖母の来訪は多く、入園前までは、そのたびに、汽車で二、三時間離れている祖父母の家庭に連れ帰り、二三週間あずかってまた連れて来るという状態が続いた。また祖母は機会あるごとに本人の父親と継母に祖父母の家に転居することをすすめる。

父親は転居してもよいという意見であるが、継母は「祖父母の家では、恵子の養育は困難だ」と強く反対している。

#### ・ 恵子と母親の態度

母親の兄弟が教職（小学校勤務）にあることから教育に熱心であり、ことのほか、恵子のことには、実子以上の気のつかい方をしている。買物の帰りに立ち寄られて、一しよに下園したり、雨の日、傘を持って迎えに来て、「恵子ちゃん、傘を持って来たよ、長靴はききなさい」と差し出し、恵子がたまって受け取って行く様子は、二人だけの、親と子の情景ではなく、何かに見せるための、極端に言えば、芝居じみたところがあつた。

私の所にたずねて来られたのは、入園十日

#### 日目

「園より配布された絵本の中に付録が入っていないかつた。近所の子どもが持っていたのに、恵子は持っていない。恵子にたずねると、『もらっていない、そんなもの知らん』と言う。先生がひとりだけにやらないで放っておくことはしないだろう。それなら、落して帰って来たのに違いない。『おとしたのだろう』と聞くと『おとしてない』と言う。時どき嘘をつくから、またそんなことではないだろうかと思つたが、ちよつとたずねに来た」とのことであつた。絵本の付録は、保育室の入口に落ちていたのを一冊拾つておいた。帰宅を急いで靴をはく時にも落として気がつかなくなつたのかもしれないし、落ちていた付録とは関係なしに、私が間違えて付録の入っていない絵本を渡したのかもしれない。

母親には、私の手落ちを詫びて残つていた付録を渡した。

その時に、一度話しておこうと思つてしたが、と家庭の問題を話された。

未熟な私は、その事情をのみ込むことに精一ぱいであつたが、園長の助けを得て、「母親が、ひとりで切りまわそうとしてあせつても、無駄であるから、父親とよく話し合うとよい。機会があれば、父親や、たびたび訪れる祖母に、幼稚園にたずねて来られて、いろいろ話し合つてみたいから、そのようにすすめて欲しい」ことを話し合う。母親は、どうにかして恵子と本当の親子に見られたい、恵子に頼りたい気持ちを持つており、その奥には、祖母を慕つている恵子を育て、自分の方に寄せつけて、祖母の家族や父親を驚かしてやろうといった強い母の性格がはつきりみえた。

#### ・ 恵子の態度

母親と二人になると、母親に頼り、言う通りに従うが、祖母や父が加わると、母親に向かつて「母ちゃんなんか、どこか、行つてもいい、いなかへ帰んなさい」と悪言をはく。時には毛髪を引つはったり、叩い

たりして、母親に手向かう。夜尿症がある。

・ 父親の態度

何事にも消極的、祖父母の意見に従うことが多く、母親の立場を余り理解しながらない。

二、幼稚園に入って

恵子はこれだけの事情を担って入園して来た。

・ 入園五日目の記録

晃一と一しょに登園する。晃一が「お早う」と挨拶すると恵子は、はずかしそうに見ている。「お早うございます」と挨拶を返し部屋に迎える。自分のロッカー、靴箱をよく憶えており、定められた通りにひとりで整理出来る。部屋で「かごめ」が始まり誘うと仲間に入るが歌わない。おとなしいが、まだ顔がほころびない。

・ 十一日目(母親来園の翌日)

日付カードに貼紙をはっている側に行き「今日はどこかわかる？」とたずねる。だまって、カードを指で押さえ、前につき出す。

「昨日、恵子ちゃんのお母さん、幼稚園にいらしたの知っている？」手に持ったカードを見ながら、うなずく。

「恵子ちゃんは、その間どうしていたの」だまっている。

「お留守番だったのかしら」うなずく。

「お母さん、付録を持って帰ったでしょう」うなずく。「お母さんね、恵子ちゃんの付録がないからって、わざわざ取りに来て下さったのよ」

「恵子ちゃん、あれどうしたの」

下を向いたまま、「おとした」と言う。「そう、落としたの、先生は、もらわなかったのかと思って」と言う。「入ってなかった」と言い直し、急いでバスケットの所に行き、カードを片付ける。

三、恵子をあずかつて

このような恵子をあずかつて、私のしなければならない仕事は多い。今まで母親が出来なかった固いから、をときほぐしてやらねはならない。

(1) 恵子に出来るだけ近づこう

まず初めに恵子との強い結びつきが必要だ。母親もその気持でのぞんだことであるが、祖母や父親という障害が加わって今だに成功していない。私には、園の先生がたや子どもたちという協力者が大勢あり、障害のないことが、明かるい期待を持たせてくれた。

恵子の周りに子どもたちがいる時をねらって順々に話しかけ、その最後には、きまつて恵子に会話を向けた。

(2) お母さんは立派な人であることを認めていく。

恵子の周囲の者がお母さんの偉いことを認めて、本人にもその気持を持つようになせたい。子どもたちを協力者にして、会話の途中で話題をお母さんに結びつけていった。ちょうど母の日はよい機会だと期待したが、五月に入つてすぐ麻疹で欠席になり残念に思った。

(3) 家庭との連絡係になつてもらう。

今はまだ手紙による連絡しか出来ないが、頼まれたことを母親に伝えることで親

しさを増すきっかけが出来るのではないかと  
思っている。

(4) その他父親の協力、母親の態度を改め  
させるなど大きな問題が次々に出てくる。

四、入園後一と月を過ごして

麻疹による欠席中の連絡は、恵子と私の  
結びつきを強くした。また鯉のぼりを作っ  
て送ったことで一層、その態度を柔らかく  
変えた。その後、五、六人のグループによ  
る指導の機会が与えられて、こわばった顔  
もほぐれ始めた。それと同時に、いつまで  
も私の気を引いておこうとする粘液質な態  
度が出てきた。

大勢の注目をあびて行動することは出来  
ないがひとりだけ、特別に扱ってもらいた  
い状態である。今まではおとなたちが勝手  
に、偏った愛情で恵子を奪い合った。それ  
で当惑した恵子は、おとなの言いなりに従  
い、二、三週間は祖母に頼り、家に帰っては  
母親の愛情ある厳しいしつけに従わねばな  
らなかった。祖母の許した行為も母の元で  
は許されない。やっと母親のしつけをのみ

込んで母親に頼ると、母親の注意をひく妹  
が気になり始める。その中に祖母が迎えに  
来てまた生活が変わる。初めのうち、私に対  
したうさそうな顔もおとなに対する反撥  
であったようだ。少しずつその状態がほぐ  
れてきたことをうれしく思っている。

私を必要とし始めた事は、初めの解決の  
糸口がついてきた事を認めさせてくれた。

第一、第二の段階と次々に問題が処理され

## 友だちと遊ぶ機会をもたなかった子ども

武 南 礼 子

K君は、昨年の四月に二年保育として入

園した。家族はK君のお姉さんが小学校五  
年であるとお父さん、お母さん、そしてK  
君の隣りにK君のお母さんの実家がある。

四月に入園した当時、心細げに涙ぐんだ  
りしていたが他にも同じ状態の子どもはい  
たし、またその他の面でも、まだ他の子ど  
もが同じ状態であったから、K君の変わっ

ていくに従い、最も大事な交友関係も起っ  
てくるだろう。祖母には偏愛され、母親には  
嘘を時々つく子どもと思われ、父親は無関  
心という間に育ってきた恵子が、どこまで  
友だちと和して行くことが出来るだろう  
か。

恵子が独りで進んで行ける最大限度の人  
間関係の道すじまで、導いてやりたいもの  
だと思っている。(八幡・大蔵幼稚園)

た面を見つけ出さずにいた。

五月に入り、K君だけがまだ遊べない、そ  
してリズムの方にも参加しないし、返事も  
出来ない。声を出して私に話しかけること  
もせず、質問しても「うん」とか「違う」と  
か首でするのみだったので、これはすこし  
特別に気をつけなくては、と感じ始めた。  
お母様に伺うと、近所に遊び友だちがいな